

とと通信

2025年11月23日発行

272号

「とと通信」は
田舎でどきどき
いつも読んでいます
おかげさまで

こんにちは！平川です。朝晩の冷え込みが増してきました。いかがお過ごしでしょうか。私はインフルエンザにかかり寝込んでしまいました。体の節々が痛いなあと思っていたら床の定です。妻からは食生活の乱れが原因よと言われました。今は数日寝込んで仕事に支障はありませんが、若い頃は仕事に追われる毎日で、寝込むともうお手上げでした。でも心の片隅では「あー、やっとこれで休める。開放される」と病気になるほどホッとしている自分もいたのです。そんな頃に出会ったのが岡部明美さんの「病氣」という詞です。では今月もはりきっていきましょ。



病氣

あなたが自分の心とからだを痛めつけるような生き方をしているとき、不自然な生活習慣をやめなさい、とき、心が葛藤で苦しんでいるとき、からだは病氣という手段を使って、あなたのいのちを救おう

とする。それは悲しいほど正確なもののシステム。病氣は大自然のあなたの姿から遠く生きていることへの警告。からだがあなただけのために投げかけた命綱。病氣はどこまでもどこまでもあなたのいのちを守ろうとする、あたたかないのちのシステム。

著者の岡部さんは36歳の時、重い脳腫瘍を患い生死の境をさまよいます。それをきっかけに、なぜ病氣になったのかと自分に問うようになり、病氣は偶然の不幸ではなく、大切なメッセージを伝えようとしている事に気づきます。経験に基づいた言葉には説得力があります。この詩集を読むと、心や体が弱っていると感じた時、勇気や希望を取り戻せます。一生手元に置いておきたい本です。



岡部明美氏著
(善文社)

以前も書きましたが、「野球ごめんね」というお話を書きます。これはネットでも話題になりましたので、ご存知の方も多いかと思いますが、

野球ごめんね 作者不明

幼い頃に父が亡くなり、母は再婚もせず、俺を育ててくれた。学もなく、技術もなかった母は、個人商店の手伝いみたいな仕事で生計を立てていた。それでも当時住んでいた土地は、まだ人情が残っていたので、何とか母子二人で質素に暮らしていた。娯楽をする余裕なんてなく、日曜日は母の手作りの弁当を持って、近所の河原とかに遊びに行っていた。給料をもらった次の日曜日には、グリーンパーンとコーラを買ってくれた。ある日、母が勤め先からプロ野球のチケットを2枚もらってきた。俺は生まれて初めてのプロ野球観戦に興奮し、母はいつもより少しだけ豪華な弁当を作ってくれた。野球場に着き、チケットを見せて入ろうとすると係員に止められた。母がもらったのは招待券ではなく、優待券だった。



チケット売り場で一人100円ずつ払ってチケットを買わなければいけないと言われた。帰りの電車賃くらいしか持っていなかった俺たちは、外のベンチで弁当を食べて帰った。電車の中で無言の母に「楽しかったよ」と言ったら、母は「母ちゃん、バカでごめんね」と言って涙を少しこぼした。俺は母に「楽しいと思いをさせた貧乏と無学がとことん嫌になって、一生懸命に勉強した。新聞奨学生として大学まで進み、いっばしの社会人になった。母も喜んでくれた。そんな母が去年の暮れに亡くなった。死ぬ前に一度だけ目を覚まし、思い出したように「野球ごめんね」と言った。俺は、楽しかったよと言おうとしたが、最後まで声にならなかった。これを読むと、いつも涙します。息を引き取る前に野球ごめんねと言ったお母さん。子供に何もしてやれなかった。思ったのかもしれない。でも私はそう思いません。子供はお母さんから十分すぎる愛情をもらいました。母親は偉大です。

発行／有限会社アサム 平川雅樹
〒819-1127 福岡県糸島市有田中央 2-14-36
☎092-321-4001 ✉ hirakawa@asam.jp

・伊都倫理法人会ブログ : <https://itorinri.com/>